

ロバート・ブラウニングの劇詩「ピパは過ぎ行く」の芸術的均整美について

ロバート・ブラウニングの劇詩「ピパは過ぎ行く」の 芸術的均整美について

三 谷 正

(一) 序

(二) 情緒

(1) 情緒の力

(2) 情緒の力は潜勢的

(3) 最重要情緒の探求

(三) 情緒と知性

(四) イメージと芸術的理性

(五) 結び

(一) 序

芸術を、その表現について、内面的に考えるとき、情緒、知性、芸術的理性の三つから芸術は生みだされると思う。芸術の一つである文学も亦、この三つから生れる。そしてこの三つは、いづれも重要で、どの一つを欠いても芸術、文学は生れない。しかし強いてその役割について主役とか、脇役とでも言うべきものを定めるとすれば、情緒が主役、知性と芸術的理性は脇役であると思う。ただ文学に於いては媒材〈medium〉

が言葉である。正確に言えば言葉の意味〈significance〉が媒材である。この点から、他の芸術よりも知性の分野が広い。また文学に於いては、韻文と散文があり、それが更に詩、劇、小説などに細分化され、その形式が種々であるため、芸術的理性の働く分野も大である。ここに文学に於いては、情緒、知性、芸術的理性の均整の問題が起る。即ち情緒の主役としての分野を、知性、芸術的理性の脇役が侵していないかどうかの問題が起る。さてロバート・ブラウニング〈Robert Browning〉の劇詩「ピパは過ぎ行く」〈Pippa Passes〉が従来、完全な作品、均整のとれた作品と言われるのは、劇としての形式が整っているということが、先づあげられることであろう。しかしそれにもまして、この作が文学作品として、情緒、知性、芸術的理性という内面的要素、即ち文学の根本的要素がアンバランスでなく均整がとれている点が、より重要な点としてあげられるべきではないか。芸術作品はすべて情緒を中心として、それに知性、芸術的理性が適当に加えられて、はじめて完全な、均整のとれた作品が生れるものと信ずる。しかし芸術作品の一つである文学作品は、上述のように、情緒に加えられる知性、芸術的理性の分野が広く、殊にブラウニングの多くの作品には知性の分野が広いのである。然るにこの劇詩に於いては情緒の中心的地位が妨げられることなく、知性と芸術的理性が適当に加えられ、芸術品として完全な均整のとれたものとなっている。

(二) 情緒

(1) 情緒の力

この劇詩の序詞の冒頭に次の句がある。

「旭日は速く、益益速く、夜の縁に溢れ、遂に沸り立つ、純金が沸り立つ、雲の盃の縁に。」

されど迸る日の光も、その盃の縁に遮られては、溢れかねて見えたり。

その一瞬前、一面灰色の東雲蔽い、その東雲の彼方の間隙の邊に、光の泡の一片も触れることなかりしに。

然るに、今、日光の漣、一つまた、一つ波立ちて、遂に抑制の力を破り、日の出の全貌、真紅の姿、登り来りぬ。

その煮え沸る日の胸、矢継ぎ早やに煌き、金色帯びて下界を蔽えり①」

これは新しい年の初日の出の描写であって、この詩を読むものは誰しも、先づこの句に心ひかれるものと思う。これに魅せられ、更に読み進

ロバート・ブラウニングの劇詩「ピパは過ぎ行く」の芸術的均整美について

むと次の句が現われる。

「ああ、然り、紛う方なく、わが姫百合咲き出でぬ。

ああ、聖アグネスの唇さながら、七面鳥の鳥冠そのままに、萌え出でぬ。

もし珊瑚、漣の下なる海底に、枝張り、花咲くことあらば、海の妖精驚きて、この花笠を睜ることならん。

花笠の灯火、薄暗けれど、緑なす世界に限なく真紅の炎を撒き散らすこと必定。

可愛ゆき花よ、われは花の女王なり。

されば、われ、その一つ一つの馥郁たる花を、青虫、黄金虫の災害より、いかで護らずしてあり得んや。

葉、それを蔽うよりも、また、托葉それを抱き緊めるよりも安全に。

されば、姫百合よ、ガラス窓を突き貫けて、蜜蜂に笑いを送れかし。

そしてかれを引き寄せ、颯り、楽しみ、楽しめ、必ず、必ず。

かくて歓喜のうちにありて、汝が女王なるわれを愛し、崇め、敬えかし⑧」

これは旭日に萌える姫百合の美しい姿を歌ったものである。尤もこれらの句は序詞にあるものであるから、この詩の中の monologue⑨ 或は aside⑩ と異なり soliloquy⑪ となっていて、劇の冒頭に、観衆の心を把えようとするため、最も強く観衆の心、従って読者の心を動かすようになっている。そして言葉も、特に壮嚴に、力強く響くのである。しかし本番の劇中にもこれらと劣らずわれわれの心を魅きつける句が多く含まれている。例えば「夕」の幕に次の句がある。

「去年の日没、夕焼未だ褪せぬとき、押し流されゆく真紅の波の退くを見んとて、現われ出づる一番星、また、二番星。

つがえし矢さながら、その縁、激しき炎へ強まり燃えて、碧空を待つ弓張り月。

二重の虹、嵐を凪ぎし三月のとある日。

暖きこと五月の如く、緩かに、黄色の月光、閃く真夏の夜。

それらすべては、疾く過ぎ去りて、今、われ、それを見るによしなし。されど尚わが胸深く残りていと懐し⑫」

ルイギ・ジュニウスなるイタリアの志士、年僅か十五才の若さにありながら、オーストリア王フランシスの暴政から祖国を救わんとして、暴君刺殺に出発する瞬間、自らも殺され天国に行くを覚悟し、やがて天国に登るとき、既に故人として神のみもとに列ぶ人達に、浮世のさまを伝えんと、の気持ちを歌ったのがこの句である。正義に燃える若者の男性的な澄み切った心境を、故郷の自然に託して、表現したものである。また同じ「夕」の幕に於いて、ルイギは無気味な夕暮の静寂を破る山彦をかれの崇拜するローマの愛国者ジュニアス・ジュニウス^⑧の魂の叫びと解し、この山彦なる超自然力に託して、自らの暴君への怒りを幻想的に爆発させ、それを母に語る形の浪漫的な感動的句^⑨もある。これらに似た句がこの詩の中に次々に現われ、この詩を読むうちに、何とはなしにこの劇詩全体から迫ってくるある力に魅せられてしまうのである。このある力とはこの劇詩全体に滲透している情緒の力である。アーノルド・ベネット^⑩は「すべての文学は人生の面白さの感動によって生ずる感情、情熱、情緒の表現である^⑪」^⑫と言ひ、また「感情の動かぬところには文学は生れぬ^⑬」^⑭と言っている。これは文学作品に於ける情緒の重要性について述べたものである。われわれが文学作品を読む場合には、その作品のすじの面白さ、或は克明な性格描写、緻密な心理解剖、または生き生きとした社会の縮図、ときには人生観、宗教観、宇宙観など種々のものに関心を覚えて読むときがある。しかし世の傑作、偉大な作品に接するとき、上述の色々なものへの興味とか、関心とかよりは、寧ろその作品全体から読者に迫る力、神秘的な力に魅せられるのではない。情緒の不思議な力に心動くのではない。この詩はブラウニングの作品中の有名なものの一つではあるが、かれの最大の傑作「指環と書物」^⑮「The Ring and the Book」に匹敵するほどのものではない。しかしこの作品にわたくしが魅きつけられるのは、この作品の面白さ、心理解剖の克明さもさることながら、更にそれとは別のもの、即ちこの劇詩全体から迫る神秘的な力、情緒の力である。

(2) 情緒の力は潜勢的

情緒は食品の味のようなものである。食品の味は味覚によって感ずるだけである。味そのものとしては食品のどこにも姿を現わさない。味の姿は見えないが、味の旨味^⑯があるため、われわれは食品を口にすると。情緒も、情緒自体としてはその姿を作品には現わさない。ただ作品の中に滲透しているだけである。しかし情緒はその内奥に読者の心を動かす神秘的な力を秘めている。この神秘的な力が食品の旨味に当るものである。読者はこの力に触れたいために作品を読む。けれどもこの力は知性的には把握されないものであるから、ここにわたくしは神秘的な力と言ったのである。文学が言わく言い難しと言われるのはこのことを指しているのである。文学は感情に訴えるものであるから、作品の情緒は、作者から読

ロバート・ブラウニングの劇詩「ピパは過ぎ行く」の芸術的均整美について

ロバート・ブラウニングの劇詩「ピパは過ぎ行く」の芸術的均整美について

者にただ伝わるだけである。この故に情緒の力は顯勢的に外に現われているのではなく、内に秘められた潜勢力である。しかしわれわれがこの力に触れるがためには知性の力を借らねばならない。果物の旨味を味うためにはその果肉を口にせねばならない。これと同様に、情緒の神秘的な力に触れるがためには、情緒の滲透しているその作品の詩句或は文章を読み、それに滲透している神秘的な力に触れるのである。この詩の「昼」の幕に次の句がある。

「涼しいお目のあなたというお方。

今、あなたが眺めさせて下さいますように、永久にあなたのお目を眺めさせて戴けますなら、

わたくしは信じます、すべての罪、^な為された悪と堪え忍びました苦難のすべては、低く、より低く、地上に落ちてしまいます。

低いもののすべては地上から来り、地上に触れたままに止るのです。

あなたのお目に魅きつけられ、清浄無垢の身に清められ、あなたの高みに達しようとするわたくしの、これからの生涯に、それらは決して襲いかかることはないでしょう。

あなたの高みに登って行くのがわたくしで、恥辱や苦患はわたくしではないのです。

そして恥辱と苦患は沈み、わたくしから離れて行くのです。

わたくしは高みに登り、あの人達から超然としています。

どうぞ、わたくしをこのままに、世俗から超然とさせて下さいまし^⑩」

フィーネ^⑪「Pippa」という純情の小娘は彫刻家ジュールズ^⑫「Ez」の悪友の奸計に乗せられ、自らは何も知らずに、ジュールズと無理矢理に教会で結婚式を挙げさせられる。式終ってジュールズの家に着き、かれの芸術論を聞くに及び、かれの教養の高きに魅せられ、かれに愛情を覚え、自らの美しい心を打ちあげたのがこの句である。また序詞の中にピパ^⑬「Pippa」がフィーネについて語り、ピパの清い心を暗示する次の句がある。

「雪と紛う清く真白き頬の閃き、^{まっげ}睫のほかは何より黒き輝く髪、

かの女、その睨を隠す工夫いかでなさざる、その頬をヴェールにて蔽えるは、いと礼讓の篤き証拠。

ジュールズよ、かの女は眺め見る花嫁にして、かりそめにもその肉体に触れるべき花嫁ならず、しかとこれを胸にとどめんことを。

かかる淑女は姫百合さながら、人の一息すら、その純白を汚すを恐れ、顔の一つ一つの造作をば、いと大切に扱う習慣。

かかる淑女こそ平穩、事なき生を送らん。

貞節犯され易き世の女人の中にありて、かかる純白、実に不思議。

おお、あの額より流れ落ちる処女の純潔を護らんことを、あの足の淑女の精華を保たんことを、あの足首の絶妙の慎みを失うことなからんことを、われは膝まで剥き出しのまま跳ね廻る、かの女にかかる歩みなさしめざらんことを。

真実の、初めての、うぶの接吻、あの素晴らしき祝福を、かの女、いかにしてジュールズに与えんとするなるや。

おお、いや、われ、これを羨むことなからん

これらはいづれも清純の情緒を現わしている。しかしこの情緒が読者に伝わるにはブラウニングの知性による叙述に頼らざるを得ない。この叙述が前述の果物の果実に当るのである。ここにこの清純の情緒は、フィーネの高みに登る心の動き、またかの女の処女の純潔についてのブラウニングの叙述の内面に、その姿を隠し、しかも滲透して存在し、われわれがこの叙述を読むことによって、はじめてわれわれに伝わるのである。故に情緒は潜勢的と言えらると思う。

(3) 最重要の情緒の探求

食品の旨味には甘い旨味、酸い旨味、辛い旨味などの種々の旨味がある。同様に情緒にも種々のものがある。この劇詩には清純の情緒の外に種々の情緒がある。陶酔、歓喜の情緒としては「朝」の幕の終り近く、この幕の頂点〈Climax〉となつてゐるオティマ〈Ottima〉とシボールド〈Sebold〉の交わす言葉がそれである。シボールドはオティマの夫ルカ〈Luka〉を殺したことに對する良心の苛責を覚え、オティマへの愛が漸次に薄れ行くものの如くであった。これを見たオティマはシボールドの愛を元にもどそうとして、かれに、かの女とかれとの過去の愛の歡樂を回想せしめようとして

「わたし達、森の中、草に埋れ横たわりしこと思い出されて？」

強風、頭上を休みなく吹き荒み、

ロバト・ブラウニングの劇詩「ピパは過ぎ行く」の芸術的均整美について

ロバート・ブラウニングの劇詩「ピパは過ぎ行く」の芸術的均整美について

白く輝く稲妻、臥し戸の屋根なる松の樹を貫き閃き、

恰も神の御使、密生の樹の帳を潜り、

罪深きあなたとわたしを探し求め、

目茶苦茶に突き込み、突き込むようでした。

海の全面を蔽い唸る怒濤のように、天空に雷、轟き渡るのでした^⑭」

の極めて抒情的な言葉ではじまるのではあるが、互の肉交^⑮、接吻などの陶醉、歓楽の官能的な句^⑯がある。感傷、哀切の情緒としてはピパの友なる小娘の次の唄がある。

「あなたは、わたしをいつまでも愛し愛して下さるか。

あなたのお気持変わりませんか。

それなら、あなたの愛のお返し、延びに、延びても

わたしは、いつも、いつまでも、

待って、待って、待ちますよ。

あなたの胸のその花は、

春の四月が種子蒔いて、

夏の六月育てた花よ。

わたしは蒔きます花の種子

心の籠もった花の種子、

その種子の一つ二つは、

芽吹き花を咲かせます。

あなたが摘んで捨てない花を、

あなたに恋され得なくとも、

あなたに好かれ得る花を、

それさえなくもせめての希い、

あなたの恋の名残の花と、

あなたの暫し眺めらる、

墓場の一つの淋しい藁、

あなたの一目、千々の悩みを、

償いますよ、癒し消します。

何んでわたしは死にましょう。

わたしは、いつも、いつまでも、

あなたを愛しつづけます^⑩」

熱狂の情緒には、先きに述べたルイギが王殺害決意の熱狂的情熱を示す次の句がある。

「地上はわれと休戦し、

天上はわれと融合し、

万物は争いを中止せり。

蟬、笑を湛えてわれに言う、

『それ見よ、かれ行く、

それ見よ、かれ行く、

稿えかれを、疾く稿え、時は迫るぞ。

世の人のため、かれは行く。

ロバート・ブラウニングの劇詩「ピパは過ぎ行く」の芸術的均整美について

ロバート・ブラウニングの劇詩「ピパは過ぎ行く」の芸術的均整美について

これは初めの終りの機会なるぞ、

かれを稿え、わが友を稿え」

この心尽しに、われは報いん。

われは行かん断頭台に、朗らかに、

われ行かん、今宵こそ、おん母上よ^⑧」

種々の情緒のうち、清純の情緒はこの劇詩の到るところにあって、この劇詩の最重要の情緒となっている。それは食品に於いて、その食品の独特の旨味はその食品の生命であると同様に、清純の情緒はこの劇詩の生命となっている。先きに述べた「朝」の幕の陶醉、歓楽の情緒も、人間性の真実には相違ないが、また人間性の羞恥の面でもあって、この句の直後に現われるピパの歌う清純の情緒との極端な対比によってカタルシスの効果を狙ったと思われるものである。また食品の独特の旨味はその食品の珍重されるための、その食品の存在価値を決定するものである。従ってその食品の独特の旨味はその食品を作ることの最重要事であり、その食品製造の要^{かなめ}である。即ちその旨味がその食品の製造に於ける主動的地位をもつものであって、その食品製造工程のすべてが、その食品の旨味を出す仕事に集中されるものである。同様にこの劇詩に於ける清純の情緒はこの詩の存在価値を決定するもの、ブラウニングのこの詩創作の最重要のもので、かれのこの詩創作のすべての経過はこれに集中されているものである。故にこの詩に於いては、種々の情緒のうち、特にこの清純の情緒^⑨を探究するところに、この劇詩の鑑賞の価値がある。

(三) 情緒と知性

情緒は芸術を統一するもので、芸術で最も重要なものなる故、われわれの文学作品に於いて探究すべきは情緒である。再びベネットの言葉を借れば、「文学趣味が進むにつれて、情緒は抑制された状態にあって、また緩^{ゆるや}かな状態にあって、文学作品の中に益益広く充分に認められるようになる。文学作品に於いて探究せねばならないのは、この情緒である。文学を、そしてすべての芸術を統一するのはこの情緒である^⑩」と。しかし文学に於いてはこの情緒の探究には知性の働きを借らねばならない。それは文学が言葉の意味という媒材を必要とするからである。

芸術の中で音楽は直接に情緒を伝える濃度の高いものである。例えばわれわれはある外国語を知らずとも、その外国語による音楽を聴き、快感を覚えるものである。これは音楽がわれわれの感覚を通じて直接に情緒を伝えるからである。絵画についても同様のことが言えると思う。とは言っても音楽、絵画が全然知性を必要としないと言う意味ではない。これはあくまでも比較的問題である。ただ直接的に情緒に訴える濃度が高いと言ふにすぎない。音楽も絵画も表現と言う根本的の点から言えば、やはり知性の働きを借らなければならない。この知性の働きを借るということが媒材を必要とすることである。音楽は音を媒材とし、絵画は形を媒材とするのである。そして文学は言葉^{ことば}を媒材とする。いずれの場合も媒材であるから情緒を伝える仲介物である。然るに同じく媒材といっても、文学の媒材である言葉には、言葉のもつ意味^{significance}と言ふものがある。この意味を仲介として情緒を伝えるのである。音楽の媒材の音、或は絵画の媒材の形は、われわれの感覚を通して直接に、われわれの情緒に訴えるのであるが、文学の媒材の言葉の意味はわれわれの感覚を通じて、先づ知性に訴え、然る後に情緒に訴えるのである。ここに文学が他の芸術よりも知性の比重が大であると言わねばならないのである。この点が、文学に於いて作者が言葉をよく選択し、その言葉の意味によって情緒伝達の効果をあげようと努め、読者はその言葉の意味を正確に理解しようと努力する所以がある。この故にわれわれは言葉の意味を理解しようと努力するのである。しかしそれは情緒を得るための努力であり、情緒感得の手段にすぎないのである。われわれの終局の目的は情緒に触れることである。ここにブラウニングがこの詩に於いて、自らの内にもっている熾烈な情緒を、かれの知識即ち知性を駆使して表現し、いかに強くわれわれの情緒に訴えるかを次の句によって検討してみたい。

「おお、日の光。われ、もし汝の漣、わが室の一日の断片、を浪費するに止るならば、

よし、それが、汝のささやかな見詰め、ただの目配せにすぎずとも、

よし、それが、汝の授ける下附のもの、汝の与える余分の賜物なりとも、

汝の選り抜きて、われに与えし一日を、

汝の偶然に与えしこの一日を、

よし、それが、神の汝への賦課なりとも、

汝の戯れの気紛れなりとも、

ロバート・ブラウニングの劇詩「ピパは過ぎ行く」の芸術的均整美について

ロバート・ブラウニングの劇詩「ピパは過ぎ行く」の芸術的均整美について

われ、日々の勤勞に、また遊戲にわが一日を浪費するならば、
恥辱はアソロに、禍はわれに落ちん。

汝の長き青き壯嚴の日脚、晴朗に流れるのとき、

われは感ず、大地はそこに、着実に日の恩沢を得と。

汝の斷続常なき一瞬の光、行きつもどりつするのとき、

大地は喜びのあまり茶目氣もて、仕事手につかざる如し。

喜びのこの一日のすべてのものを、われのものたらしめんことわが希い。

されど、汝、われを扱うに、この辺りに居を構え、

最高の幸運築みて、汝の与えるもの^{ことごと}尽く喜びのうちに受け容れ、

他方にて、汝の与うすべてを拒み、捨て置きて氣にとどめざる、

かの裕福の人の如くにあらざらんことを。

その故は、日の光よ、わが聖日よ、

汝、もし、われを、一介のピパなるわれを虐げることあらば、

われ、昨夜投げ捨てし去年の悲しみ、明日、また、われを訪れん。

されど、もし、汝のわれを、やさしく扱うこと判明すれば、

新しき年の憂きことに、われの堪え得る力を充分に、汝より借ることを得ん。

他のすべての人々は、男にありても女にありても、

この大地を己がものとなし、一年のすべて^{ひととせ}の日々を自由に過し、

己が持てる万^{よろ}ずのものの豊かさもて、特殊のものの乏しさを償いおれり。

かれら、もし、一つの手段に喜びを得ることなければ、

他の手段もて、よりよき、より多き喜びを得ること可能なり。

然るに、われにとり、汝は唯の一日なり。

もし、さにあらずとせば、全く無味乾燥に過ぎ行くものを、

天上の風味もて発酵させんとの御意よりの神の送り給いし一日なり。

汝の輝き、この一年の日毎日毎、われを助ける唯一の一つの光とならん^⑧」

これは貧しい糸繰り乙女のピパが一年のうち元旦の一日だけの休日を、いかに幸福に過そうかと、初日の出に呼びかけた句である。擬人法〈personification〉、暗喩〈metaphor〉、二詞一意〈hendiadys〉などの修辭法の知識、光線の微妙な動き、太陽の恩沢、ひいては神の属性、富める幸運の人と貧しく不幸な人間の心理などブラウニングの知性の駆使が、縦横無尽に行われてはいるが、読者のわれわれにはそれらの知識にわずらわされることなく、あわれな孤児ピパの一日の幸福への憧れの情緒に触れるのみである。われわれはただピパの一日の幸福への強い情緒に圧倒される感じを抱くにすぎないのである。これはブラウニングが種々の知識を駆使してはいるが、常に情緒を主動的立場に置いて、この詩句全体を統一しているからである。また次の句もある。

「そうです。真実の生きたこの美しいフィーネを見出すまでは、

宇宙の森羅万象を通じて芸術という手段によって、

よりよき自然を生みだすための種々の素材をさがし求めたのです。

わたしにとっては、一つ一つの物象がただ一種の美、人間の原型に向っているように思われたのです。

どこに目を向けても、そこにはその美、その原型の暗示的胚種がありました。

樹にも花にもまたその果実を取っても。

桃につづいて、薔薇色の姿が、桃の樹の枝の上に、蜜蜂のように曲線を描くのです。

同様に、また、薔薇色の手と足が、垂れるように葉の間に安らっていたのです。

一度そのとき、遂に桃の中から、全身揃った木の精が跳び出しました。

それにつけても、わたくしは、人の駆使する素材についての可能性をいかに見抜き得たことでしょうか。

ロバート・ブラウニングの劇詩「ピパは過ぎ行く」の芸術的均整美について

ロバート・ブラウニングの劇詩「ピパは過ぎ行く」の芸術的均整美について

光輪のように光を放つ真珠色の、ぼうとした薄暗りがそれを包んで、

空気との接触を半ば和らげる外殻もてる、滑らかな扱い易き白亜から、

世のすべての人々の信頼寄せるその堅さをば、明瞭に示し得るそのきりっとした鋼鉄に到るまで。

けれど、矢張り、結局は、大理石ほどのものではありません。

大理石こそは、わたしの道具の下に、ゼリーよりも柔軟です。

言わば、地球の真中の深き処から掘り出された、一つの美しい原始の時よりの生物です。

其処、地中の深き処にて、自己繁殖する生物です。

其処からすべての低い物象が得られ、またそれを空気の如き縹渺たるものに精製するのが大理石です。

また、それを凝縮しダイヤモンドにするのも大理石です。

そこに一つの金属があるでしょう。その金属のわたしの鑿を走らせるとき、そして薄皮を一つ一つ剥ぎつつ中へ近づくとき、

青白い血管が眠るが如く横たわるのは、豊かな肉ではないですか。

急所を抉る如くして、ぐさっと突き込む素速い鑿に驚いて、閃き、耀きが鑿の跡に拡がり、うろつく処、

不思議ならざる曲折の中に火炎が潜むのです。」

これはフィーネの心を動かしただジュールズの大大理石彫刻への強い愛着の情熱をぶちまけたものである。これによってフィーネは(1)の(2)で述べたかの女の清純の言葉を発したのであった。芸術家にとっては、森羅万象、それが無心の自然の木石から人工の鋼鉄に到るまで、すべて生命のある芸術の素材であり、彫刻家にとっては、大理石は原始の時代より地下深き処に自己繁殖する生物で、青白い血管の波打つ豊かな肉づきの生命体であるとするブラウニングの深遠な芸術論である。

しかしわれわれはこの句を読むとき、ブラウニングの芸術家としての生命への深い感受性に驚きはするが、種々の素材についての、かれの知性には災されることなく、ただジュールズのその道一筋への情熱的情緒に圧倒されるのみである。これらの句の外にも、狙撃者の狙撃についての細心の知識を心にくきほど活用して、暴君を狙う志士ルイギの熾烈な感情をいかにも巧みに描き上げた句、また一方では当時の政治、社

会^㉔、母性愛^㉕、昆虫^㉖などの知識を駆使して、情緒の陥り易い感傷性を救いながらも尚豊かな情緒を保持する多くの詩句、散文（Interludeは散文である）がこの劇詩には多く見受けられるのである。故にこの劇詩に於いては情緒は主動的地位を確保し、知性はその分野を守っていると言えるのである。従ってこの詩は道徳論とか、宗教論とか、または人生論とかを、劇の仮面をかぶってなしたのではなく、立派な芸術的な文学作品となっているのである。故にブルック^㉗〈Stopford A. Brooke〉も「『ピパは過ぎ行く』及びかれの他の劇詩の幾つかは情緒と思想が密接に織りなされ、言わば稲妻のようなまばゆい光彩ある敏速な行動が見られる^㉘」と言ったのであろう。かく考えると、ブラウニングがこの詩に提供する材料のすべて、その材料を説明する言葉のすべての意味を通じ、かれの情緒に触れることがこの詩を鑑賞する第一要件である。とは言ってもかれの提供する材料の意味を徹底的に理解すること、即ちブラウニングの知識を徹底して理解することなしにはこの劇詩を鑑賞することはできないのである。またキング^㉙〈Roma J. King, Jr.〉の「『ピパは過ぎ行く』は人生の衝突、人生の皮肉な回り合せなどの知性的組み立の全体から感傷性が救われている^㉚」の言葉の如く、知性の情緒抑制の役目も忘れてはならないのである。ここに文学というものの特質がある。実に情緒は知性をぬきにしては、われわれに伝わらないのではあるが、しかし文学鑑賞の最重要点は情緒であり、知性の働きは、それへの手段である。

（四） イメージと芸術的理性

この劇詩の「朝」の幕の終り近くに有名なピパの唄

「年は春にして、日は朝、

朝は七時。

岡辺には露玉を結び、

大空に雲雀舞う。

蝸牛、荆棘に這い、

神天にいます。

この世のものすべて正し^㉛」

ロバート・ブラウニングの劇詩「ピパは過ぎ行く」の芸術的均整美について

ロバート・ブラウニングの劇詩「ピパは過ぎ行く」の芸術的均整美について

がある。これは清純の乙女ピパの心のイメージである。イメージは英語の *image* で訳して映像、心像、表象と種々に使われるが、語源的には、*imagination* と同根であるが故に、わたくしはイメージを想像力、或は想像物と同じ意味に解したい。そこでイメージは作者が、知性の働く想像力によって、情緒を作者の明確な意識の統制下に置いて、その意識下に於いて情緒に形を与えたものと考えたい。故に作者が意識下に於いて自らの情緒を主動的立場に保持しながら、知性によって情緒を統一し、また組織を与えた情緒の姿がイメージである。しかしこの状態はあくまでも未だ作者の意識下にあるため、作者の想像の世界にあるにすぎない。これを意識外に表現して、句を生み、文を生み、これらを何らかの形、即ち詩、小説、劇に表現するのが芸術的理性の働きである。

今、その詳細を上述のピパの唄によって述べてみたい。この唄のイメージはブラウニングの心に映じたピパの心のイメージであるが、これは天国の神のイメージに統一され、組織化されたイメージとなっている。即ちこの唄には他のイメージの春、朝、岡辺、雲雀、蝸牛などのいくつかのイメージがあり、これらが神のイメージで統一されたものである。このイメージが、実際のピパの唄としての表現をされるには、先づ最初に、この清純のピパの唄としての表現形式の内面にあつて、神のイメージによって内面的全体が統一され、それが内面的に客観化された清純の情緒とならなければならない。この内面的客観化を行うことが芸術的理性の第一の働きである。

次にこの内面的客観化されたものを、外面的にピパの唄そのものとして表現するために、抑揚格 \wedge iambic \vee を行頭に置く抑抑二步格 \wedge anapaestic dimeter \vee を用いる必要性を認め、これによって押韻 abcdabod の八行のピパの唄としての表現をなすのが芸術的理性の第二の働きである。そしてここに注意すべきことは、この芸術的理性の働きによって客観化されて生じた唄によって表現されている情緒の統一は、論理的理性が思想を統一するように、必ずしも論理的関係が成り立っているとは限らない。たとえ、そこに論理的関係が成り立っていても、情緒の統一体の全体は直観的関係^⑥に於いて成り立っているのである。ピパの唄の「年は春にして日は朝、朝は七時」「岡辺には露玉を結び」「大空に雲雀舞う」「蝸牛荆棘に這い」「神天にいます」「この世のものすべて正し」の言葉の論理的関係を示すことは敢えて不可能ではない。

しかしただこれらの句の論理的関係のみを辿るだけではこの唄に表現されているそれぞれのイメージの関係を充分に感得したとは言えないのである。この唄に表現されているそれぞれのイメージとイメージの関係は、たとえばそれが論理的関係をもっている、その関係以上に広い深い関係がある。論理的関係はこの広い深い関係即ち芸術的關係を単に暗示するにすぎないのである。「春の朝」と「岡辺の露」「大空の雲雀」「荆棘の

蝸牛」はそれぞれ論理的関係を辿り得られるかもしれない。しかしこれらと「在天の神」「この世の正しさ」とは必ずしも論理的関係があるとは言いい切れない。然しながら前者のそれぞれの句を広く、深く考えるとき、ここに爽やかな年の始め、春の朝、清々しい露、歓喜の雲雀、生命力に溢れる蝸牛などから、これらの言葉の創り出しているイメージの質料である清新、歓喜、生命の源泉などの情緒と「在天の神」「この世の正しさ」のイメージの質料である神の属性の情緒との芸術的關係は認められ、これを認めることによって、神に統一される清純の情緒が表現されていると言えるのである。

以上はこの劇詩の一部分をなすピパの唄についての内面的、外面的客観化を行う芸術的理性について述べたのであるが、芸術的理性はこの唄を始め、他の多くの句から成り立つ「ピパは過ぎ行く」の作品全体の形式（劇詩といふ表現）を決定する第三の働きがある。即ちブラウニングが「ピパは過ぎ行く」という文学作品を、朝、昼、夕、夜の四つの幕の劇詩、しかもそれぞれの幕の登場人物は互に独立して全く関係のない一群の人物を以ってし、それぞれの場面の傍を通るピパの歌う唄で連絡統一するという劇詩の形式に表現した芸術的理性の働きがある。

この劇詩は難解の作品「ソーデロ」〈Sordello〉を完成する間に出来たものであるが、ブラウニングは「ソーデロ」の変更を要すべき点を考えながら、ただ独りダリッチ〈Dulwich〉の森の近くを散歩していた。そのときのかれの心のうちをオア夫人〈Mrs. Otte〉は次のように言っている。「ただ独り人生を渡り行く人の姿、あまりにも世に知られない身分のものとて、その足跡を世に残すことなどなし得ないけれども、しかしその歩む一歩一歩は、自らは意識せずして永久的な影響を周囲の人々に与える人の姿がかれの脳裡に閃くのであった。そしてそれをアソロ〈Asolo〉の糸繰り乙女フェリパ〈Felipa〉即ちピパに表現したのであった」と。この言葉より推察するに、ブラウニングはダリッチの森近くを散歩するとき、かれが曾てイタリアのアソロの岡に登ったときの思い出が心に甦り、オア夫人の言葉通りの心境を具体化しようと、早速この劇詩創作に取りかかったと思う。

そしてその創作過程は次のようだと想像する。アソロの岡の中腹、或は下方の富者の家、士族の家、庶民の家、教会、そして上方の城址などがブラウニングの心に甦り、それを更に具に心のうちで眺めるとき、そこに住むと覚しき人々、またその人達の心の動きのイメージがかれの心に映るのであった。そして富者の家には愛欲に懊悩する男と女、庶民の家には不逞の徒と、それとは全く反対の清い心の芸術家と小娘、士族の家には義憤の情熱にはやる若者、またそれを浮世の経験の少い子の軽率と悩む母、教会には、身、道を説く聖職にありながら物慾に目のくらむ

ロバート・ブラウニングの劇詩「ピパは過ぎ行く」の芸術的均整美について

ロバート・ブラウニングの劇詩「ピパは過ぎ行く」の芸術的均整美について

僧侶など、当時のイタリアの政情、世相に照して在り得る人間及び人間の心の動きのイメージがかれの心に映るのであった。そして次の瞬間、アソロの岡そのものが心に甦り、そこに先きに引用したピパの唄の示す清々しく、しかも歓喜の満ち溢れる岡とその上方の澄み渡る虚空といった雰囲気の中に永遠の生命の存在を偲ばしめる天国的イメージが、かれの心の中に生ずるのであった。

そしてこの人間葛藤の現実世界のイメージと天国的イメージがブラウニングの心のうち、即ちかれの意識下に於いて統一が行われるのであった。この際、人間の価値を肯定的に見るかは、地上の人間も、その危機に直面するとき、天上の憧れをもつ人間、神の声を聴き得る人間に帰るものと考えるところから、この二つのイメージを天国的イメージによって内面的全体を統一し、それを内面的に客観化された清純の情緒を中心とする芸術的關係に置くのであった。しかもかれが性来劇的性格があり、且つ目前の素材が劇的要素に富めるところから、清純の情緒そのものとブラウニング自らの間に距離を置き、この清純の情緒はすべての人間に普遍的に存在することを、より効果的に表現しようとして、主観詩よりは客観詩に属する劇詩という表現に決定することとしたのであった。

即ち先づ地上の人間の葛藤の姿を「朝」「昼」「夕」「夜」の四つの幕、四つの舞台に分けるのであった。そしてこれら四つの幕のそれぞれの舞台に登場する人物をして思う存分に地上的行動をさせるのであったが、それらの人物も前述のように危機に直面する最終に於いては、神の声に耳を傾ける人間とし、これらの人間に神の声を伝える天使として無垢の乙女ピパを配し、このピパのそれぞれの幕の唄即ち神の声を以て、個々別々の無関係な四つの幕からなるこの劇詩の全体を統一するのであった。ここにこの劇詩がいとも香り高い天上的清純の情緒を中心とした統一ある劇詩として表現されたのであった。

(五) 結 び

この劇詩は四つの幕から成るのであるが、それぞれの幕がいづれも原因〈cause〉、展開〈development〉、頂点〈climax〉、大団圓〈denouement〉という劇の有機的構成をもつ一つの劇となり、それぞれの幕に於いて、情緒、知性、芸術的理性が情緒を中心にバランスがとれている。そして劇全体が三一致〈three unities〉の法則に従い、そのうちのすぢの統一は四つのそれぞれの幕の間劇〈Interlude〉がかすかな細糸のように外面的な連結をとっているが、太い大糸とも言うべきピパのそれぞれの幕の唄が内面的に連絡の役目を果し、完全に四つの幕を統一し

て、その唄の醸し出す清纯の情緒が劇全体の主動的、中心的位置に立ち、知性と芸術的理性がこれを授け、劇詩全体が文学作品として均整がとれているのである。かくしてこの劇詩は内面的には文学の本質としての情緒、知性、芸術的理性の要素が、それぞれの分野を守り、バランスがとれ、外面的にはそれぞれの幕が劇構成の原因、展開、頂点、大団円の有機的構成を保ち、劇詩全体が三一致の法則を守り、清纯の情緒という本質的要素の具現者ピパによってすぢの統一が保たれているのである。故にこの劇詩は内面的、外面的両面の均整美のある芸術品となっているのである。アーサー・シモンズも言っている。「『ピパは過ぎ行く』はブラウニングの最も完全な作品である。……全体として芸術的均整美に於いて、これに匹敵するものは決して書いていない^⑨」と。

〔1〕 註

- ① Robert Browning : Pippa Passes, Introduction, II, 1—12
- ② ibid, II, 88—103
- ③ dramatic monologue (劇的独白) のことで、「屋」の幕のII. 1—115即ちフイーネが口を切るまでがこの形になっている。
- ④ 傍白のことで「夕」の幕のI. 84 のルイギの言葉がこの形になっている。
- ⑤ 劇中の他の人物を念頭に置いて語られる monologue と異り、主要人物が観衆に向って大声で自らの内奥の秘密を述べたり、或は作者の意図を観衆に伝える情熱的独白と解したい。
- ⑥ Robert Browning : Pippa Passes, Evening, II, 75—83
- ⑦ ibid, II, 6—15
- ⑧ Arnold Bennett : Literary Taste, Chapter IV, p. 25, II, 16—18
- ⑨ ibid, p. 26, II, 23—24
- ⑩ Robert Browning : Pippa Passes, Noon, II, 129—140
- ⑪ ibid, Introduction, II, 136—156
- ⑫ この劇では一つ一つの幕が一つの劇としての構成を持ち、原因、展開、頂点、大団円から成っている。詳しくは註^⑨参照のこと。
- ⑬ 現在の歓楽の場面に、過去の歓楽の場面を回想の形で持ち込むことによって、時の一致の工夫をなすと同時に回想の形によって、現在の歓楽のeroticismを sensual よりは sensuous に表現しようとする苦心の跡が伺われる。
- ⑭ Robert Browning : Pippa Passes, Morning, II, 190—197
- ⑮ Roma J. King, Jr. は “He treats love as mere lust in Ottima.” と The Bow and the Lyre, p. 136 で言っている。

ロバート・ブラウニングの劇詩「ピパは過ぎ行く」の芸術的均整美について

ロズ・マ・ハル・ハル・ハル・ハル「ミクゼ・ミクゼ」の挿入歌

- ⑩ Robert Browning : Pippa Passes, Morning, ll. 198—220
この詩句はブラウニングの人間性の真実の追求を示すものの一つである。しかしこの詩句全体からは人間性の真実は地上の人間性と天国の人間性
性の中間即ち煉獄的人間性であることを暗示しているものと思われる。
- ⑪ ibid., Interlude III, ll. 75—86
- ⑫ ibid., Evening, ll. 49—56
- ⑬ 清純の情熱のこの詩に於ける中心的なものは、各幕のピパの唄であり、その核心的なものは「朝」の幕の唄である。
- ⑭ Arnold Bennett : Literary Taste, p. 27, ll. 13—17
- ⑮ Robert Browning : Pippa Passes, Introduction, ll. 13—41
- ⑯ ibid., Noon, ll. 81—113
- ⑰ ibid., Evening, ll. 96—121
- ⑱ ibid., ll. 16—29
- ⑲ ibid., Interlude, I, II, III
- ⑳ ibid., Evening, ll. 129—133
- ㉑ ibid., Conclusion, ll. 1—5
- ㉒ Stopford A. Brooke : The Poetry of Robert Browning, Chapter I, p. 9
- ㉓ Roma J. King, Jr. : The Bow and the Lyre, Chapter VI, pp. 106—107
- ㉔ Robert Browning : Pippa Passes, Morning, ll. 221—228
- ㉕ 情緒の統一体の全体は直観的關係に於いて成り立っているため、芸術的理性の働きは直観の働きとも言える。
- ㉖ Mrs. Sutherland Orr : A Handbook to the Works of Robert Browning, p. 55
- ㉗ Robert Browning : Pippa Passes, Noon, ll. 283—306 及び ll. 320—327
- ㉘ ibid., Introduction, ll. 190—195 及び Night, ll. 214—229
- ㉙ (a) 朝の幕
- 原因——貧乏なへば音楽師シボールドがオティマの家庭教師としてルカ家への出入
- 展開——オティマとシボールドの恋愛関係への進展
- 頂点——オティマとシボールドの睦言、接吻、肉交の歓楽と陶醉
- 大団円——ピパの唄で、良心の苛責に堪えずしてのオティマ及びシボールドの自殺

(b) 昼の幕

原 因——ジュールズの悪友が書き上げた奸計から成るフィーネの恋文のジュールズへの発送

展 開——ジュールズとフィーネの結婚式挙行

頂 点——ジュールズの芸術論に魅せられた後のフィーネによる悪友の奸計暴露

大団円——ピパの唄によるジュールズの真の愛情と幸福な夫婦生活

(c) 夕の幕

原 因——暴君フランシス王刺殺の陰謀団へのルイギの参加

展 開——ルイギの王の暴政への怒りと王刺殺の理由についての母への説明

頂 点——母のルイギ説得と許嫁の存在のためのルイギの迷い

大団円——ピパの唄によるルイギの迷いからの覚醒、素志貫徹への出発、それによるルイギの生命の危険脱出

(d) 夜の幕

原 因——僧正の兄の死

展 開——差配人マフェオの財産管理、兄の子（実はピパ）を殺すようにとの僧正のマフェオへの依頼

頂 点——マフェオの表向き殺したことにしている子がピパの名でルカの工場に働いていることの暴露及びピパを女郎として売り飛ばすことについて
のマフェオの僧正へのなれ合いの提案並びにその提案に対する僧正の迷い

大団円——ピパの無心の唄による僧正の覚醒及びピパの無事に生命を保つこと

⑤ Arthur Symons : An Introduction to the Study of Browning, p. 52

〔Ⅱ〕 参考文献

1. Stopford A. Brooke : The Poetry of Robert Browning
2. C. Porter and H. Clarke : Browning
3. Mrs. Sutherland Orr : A Handbook to the Works of Robert Browning
4. W. O. Raymond : The Infinite Moment
5. E. L. Cary : Browning
6. F. M. Cohen : Robert Browning
7. F. R. G. Duckworth : Browning
8. J. Flew : Studies in Browning

ロンドン・イェール大学蔵「シムズ選集」の挿絵と本文の対比

ロマン・イタリヤの藝術「ソング・オブ・リヴ」の音楽的表現について

9. Arnold Bennette : Literary Taste
10. James Reeves : Understandnig Poetry
11. Roma J. King, Jr. : The Bow and the Lyre
12. 石田憲次、石川林四郎 : 註訳 Selected Poems of Robert Browning
13. 帆足理一郎 : 人生詩人ブラウニング
14. 竹友藻風 : 文学論